

## 留学・研究計画書

氏名 山田 直子	留学機関名 アンダラス大学 (西スマトラ)
留学先国名 インドネシア	留学期間 西暦 2004 年 5 月 ~ 2005 年 4 月
研究テーマ (留学目的) 「近代」と「伝統」のはざま：植民地期西スマトラ(ミナンカバウ)における母系制社会の変容と女性	
研究テーマ (留学目的) の説明	
<p>インドネシアの国民国家形成の史的考察はこれまで繰り返し議論され、多民族国家インドネシアの統合問題を考える重要な鍵として今日も検討されている。しかし、20世紀初頭の植民地期に関する多くの研究は、この時期を「ナショナリズムの勃興と発展の時代」とし、議論を一定の枠組みに押し込めてしまう傾向があった。つまり、インドネシア各地に出現した運動、事件、反乱を一様にナショナリズムと関連付け、「ナショナリズムの先駆的形態」という解釈を主とした。また、エリート層の政治思想や活動を中心に議論を展開し、周縁地域、大衆、家族、女性といった植民地社会の中の多様な要素や集団の変容については十分に考察されてこなかった。</p> <p>こうした研究状況を背景とし、これまで欠落していた「女性」という社会を構成する成員に着目し、20世紀初頭の西スマトラという植民地国家の中心（バタヴィア/ジャワ）から地理的にも文化的にも遠く、かつ社会構造や家族制度もジャワとは非常に異なる社会の歴史的過程を考察する。ミナンカバウにおいて、その特異な社会・家族制度、つまり母系制とイスラームの結合は、非常にユニークな世界を形成していた。また血族集団の中で自給自足農業を中心とした経済・社会活動を行い、政治的にも自律性をもつ社会であった。しかし20世紀に入り、人口の爆発的増加、貨幣経済の浸透、植民地行政の確立、外世界とのつながりの緊密化など、さまざまな環境変化が社会の諸要素へのプレッシャーとなった。その結果、ミナンカバウにとっての植民地後期という一時代は、単なる「伝統的」な社会から「近代的」な社会への移行ではなく、競合対立するさまざまな集団の誕生の過程であり、「近代」への模索の過程であったと言える。</p> <p>そのような「伝統」と「近代」の間に生じたテンションが女性の諸活動や女性を取り巻く社会の中にどのように映し出されているのかを明らかにするために、以下の4つを軸とした分析を行う。1) 慣習法とイスラーム法がどのように女性を家族や社会の中に位置付け、女性の行動規範となっていたのか。またそれらの規定がどのように儀礼や毎日の習慣として実際に実行されていたのかを植民地文書、民俗誌、歴史伝承などから探る。2) 20世紀初頭から女性の共同体の外とのつながりが、情報媒体の発展、女子教育（西欧教育とイスラーム教育）の急速な普及などを通じて緊密になっていった。女性を「近代」に接近させたこのような社会的諸要因を分析する。3) 20世紀初頭、蘭領東インドの広範囲において女性団体が続々と誕生したが、この現象は西スマトラにおいても確認でき、「スマトラ婦人連合」などいくつかの女性団体が設立され活動を展開した。これらの団体の設立の経緯、目的、活動内容の分析を行い、女性が「近代」の意味をどのように考え、「伝統」というものの存在をどのように捉えなおしたのかを考察する。4) ミナンカバウ社会の複数の主体（慣習法グループ、イスラーム改革主義グループ、民族主義団体、女性団体）の間で生成された「女性」をめぐる言説とそのぶつかり合いを、諸団体の機関誌、大衆紙などのテキスト分析によって行う。</p> <p>これらの考察により、当時の急速な社会変容に対する女性の能動的・受動的関与の解明とともに、「伝統」と「近代」の狭間で「女性」という集合的主体が創出されるプロセスと、ミナンカバウ社会の男女が示したアイデンティティの諸相に到達したい。</p>	

# 成果報告書

記入日 2005 年 7 月 22 日

氏名 山田 直子	留学先国名 インドネシア	所属機関 アンダラス大学 文学部歴史学科
<b>研究テーマ：</b> 「近代」と「伝統」のはざま：植民地期西スマトラ(ミナンカバウ)における母系制社会の変容と女性		
<b>留学期間：</b> 2003 年 10 月 ~ 2004 年 12 月		
<b>&lt;はじめに&gt;</b> 本報告ではインドネシア西スマトラ州の一村落で行った聞き取り調査の内容とその結果をまとめる。現地の文書館で行った文献収集も調査に含まれるが、既に中間報告の中で述べているのでここでは省略したい。問題関心は 19 世紀末から 20 世紀初頭のオランダ植民地期におけるミナンカバウ社会全体であるが、19 世紀末から現代までの約 1 世紀という長い時間軸を取り、一つの村という非常にマイクロな歴史空間を対象として、村落構造の連続性と非連続性をライフヒストリーの集積によって分析することを目的とした。これまで先行研究は「ミナンカバウ社会」として総体的に議論することで、自然・地理的条件や歴史経験等の差異によって生じる歴史の多元性・多様性を軽視する傾向にあったという反省から、利用可能な断片的な文書史料によってのみ歴史事象を一般化することを回避し、個人の歴史経験の集積をひとつの歴史空間に限定することによって理解するという方法を採用した。また調査の過程から、周縁地域の民衆の歴史経験からミナンカバウ社会史、さらにはインドネシア史を理解することを試みた。		
<b>&lt;調査方法と問題群&gt;</b> 西スマトラ州アガム県タンジュン・ラヤ郡ナガリ・ティゴ・コト村(人口約 5200 人)において、個人史及び村や地域の伝承を聞き取ることを目的としたフィールド調査を実施した。村に在住する 70 歳以上の男女を対象とし、無作為抽出によってインフォーマントを選び、調査協力に同意の上でインタビューを行うという方法を取った。聞き取りではインフォーマント自身の経験だけでなく、関わりのある周囲の人々、特に両親、兄弟、配偶者、子供の経験も網羅的に聞き取ることにより、村の 3 世代の歴史経験を理解することを目標とした。インフォーマントは男性 33 名、女性 51 名の合計 84 名で、年齢構成は 70 代が 64%、80 代が 26%を占めた。聞き取りは同じ人物と 2 回以上行い、初回ではインフォーマント本人の基礎的情報、つまり出生年、出生地、幼少期の家族構成と居住形態、両親の婚姻と職業、本人の教育(世俗・宗教)、仕事、婚姻、村外への移動などについて質問をした。二回目の聞き取りでは、初回で得られなかった情報を埋めていく作業と同時に、得た情報が信憑性のあるものかどうかを再確認した。さらにそれぞれのインフォーマントの経験で特に興味深いと思われた問題、あるいは活発に話をしていた内容について詳細に聞き取ることにした。さらに調査者自身の問題関心である三つの問題群、1)母系制家族形態のあり方(世帯構成、財産相続、氏族内関係)の構造的な変容、2)婚姻と離婚の形態、手続き及び通婚圏、3)土地所有と経済活動について中心に聞き取りを行った。		

### <村の概要>

**自然・地理的条件**：村の北側から西側にかけて海拔約 2,000 メートルの山々が扇状に聳え、村はマニンジャウ湖の真北に位置している。村民のほとんどが、山から流れ出る水を利用したの棚田による水稲耕作と湖での養殖に従事している。西スマトラ州の州都パダンへは公共交通機関を利用し 4 時間を要する。この村を選定した主な理由には、ミナンカバウ人の間で広く認識されてきた文化的地域区分と地理的条件による区分が一致しない地域であったということが一つある。「ミナンカバウ世界」は文化的区分によると dareh と呼ばれるミナンカバウの源流とされる地域と、それ以外の rantau と呼ばれる地域の二つの地域で形成されると理解されている。調査村は文化的区分では dareh に属するが、背後の山々によって実際には dareh 地域とは分断されており、地理的条件から考えると西側の沿岸平野部の rantau 地域により近い。この地の伝承によると、この地域は王権が存在したバウサンカル(文化的中心)から母系制社会を支えるアダット(慣習法・慣習)が沿岸部へ向けて山を下り、同時にインド洋から入ってきたイスラームが内陸へと登っていく中間地点であったとされ、「アダットとイスラームが出会った地」と土地の人々は現在においても表現している。

**社会構造**：ミナンカバウ村落社会は一般的に「ナガリ」という単位で認識される。これまで先行研究は「ナガリ」＝「村落」と翻訳し、ナガリをコミュニティの最小単位として議論してきた。さらにナガリはオランダ行政の確立する 19 世紀半ばまでは共同体的性格を持つ自律的な社会であったと結論付けてきた。しかしながら、本調査では必ずしもナガリが最小規模の村落とは限らず、ナガリ内にも村落と言えるより小規模の集落が存在したということを見出した。調査村は「ナガリ・ティゴ・コト」と呼ばれ、この名は 3 つ(ティゴ)の集落(コト)によって一つのナガリが形成されていることを明示している。三つのコトとは、現在行政上の領域としては存在しない 1)コト・バル、2)コト・ティンギ、3)パニンジャウアンである。先行研究によると「コト」はナガリに発展する一段階前の集落であるとされるが、村の伝承と今日まで継承され続けるアダットを考察すると、このナガリは独立する二つ、あるいは三つの村落から成立してきたと考えられる。

ミナンカバウ社会においては伝統的に村落行政や人々の生活はアダットによって規定される。このナガリ・ティゴ・コトの中には二つの異なるアダットが存在するというのが村人の共通した認識である。その一つはコト・バルの中で採用されているもので、もう一つはコト・ティンギとパニンジャウアンで使われているものである。具体的にそれら二つのアダットのどの部分がいかに異なるのかについては、調査の時間的な限界から検討することは出来なかったが、一つのナガリに二つのアダットが存在するということは、二つの規範が存在する、つまり二つの社会がそこに成立していたということが言える。一方で、各コト内に伝わる村落の歴史伝承の共通性から導き出せる結論は、ナガリ・ティゴ・コトのなかに自然村は三つあり、それは上述の三つのコトであったということである。この三つの領域は行政単位としてはこれまで存在したことがなく、今日に至るまで不可視な村落領域であるにもかかわらず、現在においても村人の帰属意識はこの領域に伴っている。

さらに興味深いことに、ナガリ・ティゴ・コトの通婚圏を調査すると、インフォーマントの 9 割以上が自らの属するコト内で結婚相手を得ており、これら三つのコトをクロスする婚姻関係はブンフルと呼ばれる伝統的な村の指導者層やイスラーム権威者という少数の限られた人物の間では存在したが、一般農民の間では皆無に等しい。言い換えると、各コトはその内部で婚姻関係を結び、家族関係を強化することを志向し、たとえ一つのナガリ領域内でも他のコトの村人との結婚は一般的な慣行ではなかったということである。婚姻問題については下記に詳しく述べるが、婚姻という男女の契約は氏族間の契約でもあり、それにより土地の所有や労働

交換などの範囲も規定される。従って、婚姻関係からみえる村落の境界性は明らかであり、境界は明確にコトとコトの間で引かれ一般農民の間でのコトを超えた交流はそれほど活発なものではなかったのではないかとということが考えられる。

**宗教とアダット：**イスラームとアダットはミナンカバウ社会の原動力となる二つの車輪であると議論されてきた。村落での定着調査では、これら二つの規範が日々の生活のなかでどのような位置を占めているのかを考察するすばらしい機会であったことは言うまでもない。上記で述べたように各コトはそれぞれ先祖から継承されてきたアダットを守り、また時代の変化に対応してアダットを修正したりする。コトの中にはさらにいくつかの氏族が存在し、各氏族はアダットを厳格に継承する守護者であり氏族の保護者でもあるプンフルと呼ばれる伝統的な指導者が長を置く。これは蘭領東インド期からスハルト期を経て今日に至るまで変わることのないミナンカバウ社会の特性である。氏族内部での土地、家屋に関する問題の処理や婚姻関係を結ぶ前に許可を与えるなど、世俗的な問題の処理にプンフルは従事する。

一方、イスラーム指導者は金曜礼拝、断食月の様々な行事や礼拝、犠牲祭の取りまとめ、結婚式や葬式の際の祈祷など宗教行事一般を管理する。プンフルでありイスラーム指導者であるというケースはほとんど無く、どちらかの一方を社会的な地位として村落社会のなかで認識され、それぞれの領域内で権威を持っている。各コトに最低2つのイスラーム学校が設置されており、小学生は全員午前の世俗学校から帰宅すると午後には宗教学校でコーランを読むためのアラビア文字やイスラームの教えを学習する。さらに夜7時から約2時間モスクや礼拝所においてコーランの読誦を子供たちは毎日行っている。聞き取り対象者であった70歳以上の村人の間においても、午後宗教学校へ行き、夜は礼拝所でコーラン読誦会に参加するという形はすでに存在し、ほとんどのインフォーマントが14歳くらいになるまで4、5年間参加していた。

#### <村落社会における結婚と離婚>

20世紀初頭、蘭領東インドでは出版資本主義の開花とともに各地で「近代」や「進歩」という概念に対する活発な議論が多くの人々を巻き込んで行われるようになった。そこでは村落社会内部に存在する「悪い伝統」として認識される要素や慣行を「近代的」あるいは「進歩的」社会の建設を阻害するものとして議論する傾向があった。ミナンカバウ社会では、一部のエリートが一夫多妻という慣行が進歩的ではなく、本来母系制社会のなかで尊ばれてきた女性の地位と環境を悪化させるものと非難した。この議論はイスラーム指導者達にとってはイスラーム批判として受け止められ、両者による激しい議論が展開された。このように社会の表層では「近代」を探る一つの問題として婚姻をめぐる言説が20世紀初頭に形成されようとしていた。ここでは聞き取り調査の結果をもとに当時の村落社会内の婚姻と離婚の実相に触れたい。

まずナガリ・ティゴ・コトにおける20世紀前半の婚姻のあり方について聞き取り調査の結果から多くの特徴を示すことができるが、ここでは2つに止めたい。第一に上記でもすでに述べた通婚圏についてである。インフォーマント84名のうち2名(ともに男性)はナガリ外の出身で、他全員は当地の出自である。村外出身の女性は存在しない。これは土地の所有者が女性であることから、自分の村を出て夫の村へ移住することは、自己所有あるいは自分の所属する家族や氏族の世襲財産から離れることを意味するため、女性は一般的に自分の村に留まる。植民地文書によると、アダットによって女性が村外出身男性と婚姻関係を結ぶことを禁止したり、あるいは罰則を伴ったりと女性の婚姻の範囲に制限を加えていた地域が存在していたことがわかっている。ナガリ・ティゴ・コトではアダットが女性の配偶者選択に対する制限を加えていないが、村民自らが各コト域内で配偶者を得ることを志向していたことは調査結果が明確に示し、特に初婚の場合はその傾向が顕著である。

2人の村外出身男性は、ガリ・ティゴ・コト出身の女性がムランタウ(他地域への移住)していた際に出会い、結婚し、妻の出身村を生活の場とすべく定着した事例である。彼らの妻は2人とも初婚は村の男性を配偶者としていたが、後に離婚し新しい配偶者を移住先で得た。このように通婚圏は非常に狭い範囲であるように見受けられるが、それは決して人々をコトという枠に押し込めているのではなく、実は人々の空間認識は非常に広いものであるということが判明した。上述したように、ミナンカバウ社会では男性が移動・移住をするムランタウと呼ばれる習慣をもち、15世紀にはすでにミナンカバウ人マレー半島に移り住んでいるのが確認されている。19世紀終わりから20世紀初頭にかけての主な移住先はマレー半島やスマトラのアチェ、メダン、リアウなどで、時期によって人々の目的地は変容する。ナガリ・ティゴ・コトの中でもコト・バルは特に多くの村民をマレー半島へ送り出していた。マレー半島へ渡ったコト・バルの人々の多くは当地に定住するが、配偶者を求めて頻りに村へ一時的に帰り、妻を得た後またマレー半島へ戻る事例が多く出てきた。父親あるいは祖父の時代に移住し、自分は村で出生していない上に、村を訪れたことが一度もないにも関わらず配偶者を求めて短期間村を訪れる。このように「狭くて広い」通婚圏の存在はミナンカバウ人の生活領域や空間認識のダイナミズムを理解するうえで非常に興味深いと思われる。

第二の特徴が結婚・離婚の頻度が高いという点である。1930年に出版された国勢調査の統計によると、蘭領東インド全域で一人当たりの結婚・離婚回数が最も多い地域が西スマトラであった。本研究の調査村においても、聞き取りの結果から結婚・離婚の回数が(我々の固着観念からすると)非常に多いという結論に至った。インフォーマントの全員が最低一度は婚姻関係を結び、半数以上が複数回の結婚を経験している。最も多い人で6回、次に5回が3事例あった。一方、離婚回数においても半数以上が1回以上の離婚を経験し、うち5回の離婚が1事例、4回が2事例、3回が5事例という結果であった。このように、結婚・離婚というものが非常に狭いコトの内部で繰り返されていたという実態は明らかになった。28人中1名を除いて全員がジョドと呼ばれる双方の両親や伯父によって決定される結婚の形をとっていた。自らが配偶者を選ぶことはなく、事前に「お見合い」という場も設定されないため、数ヶ月という短期間の結婚生活に終わってしまう事例も多くあった。また女性の場合、高年齢の男性との結婚を半ば強制的に強いられた事例もあり、結婚生活に適應できない女性が離婚を懇願したというインフォーマントも含まれた。結婚・離婚を繰り返す慣行に対して、インフォーマントの間でも否定的に理解するのは近代教育を受けた人々であり、「性格の合わない人といつまでも結婚生活を続けるよりも、別の人と結婚をするほうが良い」という認識が村落社会内に広く存在していたと考えられる。

### おわりにかえて

紙面の制約上、ミナンカバウ村落社会の変容全体を議論するには限界があり、ここでは調査の内容と方法、調査地の概要を説明し、聞き取り調査の結果から示される結婚と離婚の慣行に関する特徴を2点ほど述べた。調査の過程での興味深い発見は、ミナンカバウ人の強固な村落社会との結びつきと、それを可能にするアダットとイスラームという二つの規範がいかに存在するかということであった。また人々にとっての「村落社会の境界性」は重層的であり、一つは植民地国家あるいは独立後のインドネシア国家が上から規定した行政村落という枠組み、二つ目に人々の地縁や血縁による社会紐帯が存在する「より有機的なムラ」、さらにはミナンカバウ社会の境界を越えて出ていった人々による「ミナンカバウ社会全体としてのムラ」というものが共有されていると言えよう。「伝統」と「近代」という二分法を20世紀初頭のミナンカバウ知識人は自らに強いたが、「ムラ」内部の変容の実相は、そのような進歩の方法を探り推し進めようとしていた人々の理解との間に乖離があったことを、村落での聞き取り調査によって再確認することが可能となった。



結婚の祝宴へ向かう村人達

田植えする奥さん達の  
昼休み



稲刈り作業の休憩中  
の村人と



コト・バル集落からの湖



調査地のコト・ティンギ集落



村の芸能継承



ワルン（休憩所）の家族



結婚の儀式：新郎が新婦の家へ移動